

# ③細菌性髄膜炎の起炎菌

117D7

[細菌性髄膜炎の予防]

乳児←定期予防接種

新生児←GBS陽性の母体にペニシリン系抗菌薬投与

117回では定期予防接種、116回では母体抗菌薬投与について出題されています！



118回予想

118回では新生児髄膜炎の起炎菌として頻度が高いものはB群レンサ球菌・大腸菌ということが出題されると予想します！

# 細菌性髄膜炎の起炎菌

118回予想



新生児

B群連鎖球菌

&

大腸菌

103E16



産道感染



B群連鎖球菌

大腸菌

✓肛門から移行する!



16 新生児髄膜炎の起炎菌として頻度が高いのはどれか。2つ選べ。

- a 大腸菌
- b 髄膜炎菌
- c ブドウ球菌
- d B群レンサ球菌
- e インフルエンザ菌

乳児以降

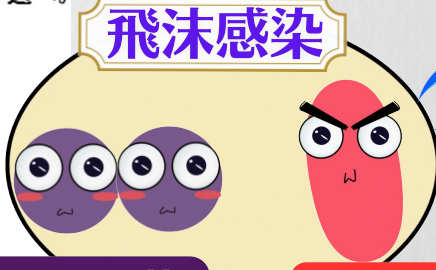


1st 肺炎球菌



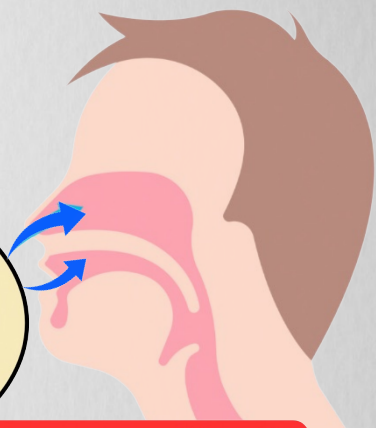
2nd インフルエンザ桿菌

104A2



肺炎球菌

インフルエンザ桿菌



飛沫感染

2 乳児の細菌性髄膜炎の起炎菌として頻度が高いのはどれか。2つ選べ。

- a 大腸菌
- b 緑膿菌
- c 肺炎球菌
- d インフルエンザ菌
- e B群溶血性レンサ球菌

111A11



ワクチンの定期予防接種が導入されて著明に減少した。

11 成人における細菌性髄膜炎の原因菌として最も頻度が高いのはどれか。

- a 大腸菌
- b 肺炎球菌
- c 髄膜炎菌
- d リステリア
- e インフルエンザ菌

117D7

7 定期予防接種の導入で小児における髄膜炎の発生頻度が著明に減少した感染症はどれか。2つ選べ。

- a 結核
- b 百日咳
- c 日本脳炎
- d 肺炎球菌感染症
- e インフルエンザ桿菌感染症



2 妊娠末期の膣分泌物細菌培養検査でB群連鎖球菌(GBS)が陽性となった妊婦に対する母子感染予防対策として、ペニシリン系抗菌薬の投与を開始する適切な時期はどれか。

☑️ **妊娠35~37週に膣ならびに肛門から検体を採取してGBS培養検査を行う。**

- a 陽性判明の時点
- b 妊娠 37 週時
- c 陣痛開始時**
- d 子宮口全開大時
- e 児頭排臨時

一時的にはB群連鎖球菌を排除できるものの  
分娩時には再び定着している可能性が高い

ちょうど分娩時に抗菌薬の血中濃度が上昇するので望ましい

抗菌薬の血中濃度が上昇する前に経産道感染が起こる可能性が高い

46 33歳の初妊婦。妊娠36週。自宅で突然水様帯下の流出を認めため1時間後に来院した。妊娠35週の妊婦健康診査時に施行した膣と外陰との培養検査では、B群レンサ球菌(GBS)が陽性であった。体温 36.4℃。脈拍 76/分、整。血圧 116/72 mmHg。膣鏡診で後膣円蓋に中等量の水様帯下の貯留を認め、帯下は弱アルカリ性である。内診で子宮口は1cm開大、展退度30%、先進部は児頭で下降度はSP-2cm。血液所見：赤血球350万、Hb 11.6 g/dl、Ht 37%、白血球9,000、血小板18万。CRP 0.1 mg/dl。腹部超音波検査で胎児推定体重は2,600g、羊水ポケットは2cm、胎盤に異常所見を認めない。胎児心拍数陣痛図で子宮収縮を認めず、胎児心拍パターンに異常を認めない。

まず投与すべきなのはどれか。

- a β遮断薬
- b 硫酸マグネシウム
- c 副腎皮質ステロイド
- d ペニシリン系抗菌薬**
- e 非ステロイド性抗炎症薬(NSAIDs)

分娩時には抗菌薬の血中濃度が上がっている必要あり



上記の対応を行うのは経産道感染によって  
新生児が髄膜炎を発症することを防ぐため!